

事情による面が大きい。10月の増資見込みは、8社42億円と、前月集中の反動もあって再び低水準に落ち込んでおり、一般事業会社の増資意欲は引

増 資 状 況

	市場第1部 上場会社		市場第2部 上場会社		合 計	
	社	億円	社	億円	社	億円
40年 10～12月	24	447	19	67	43	514
41年 1～3月	14	388	24	79	38	467
4～6月	18	415	18	31	36	445
7～9月	52	681	27	50	79	732
41年8月	10	298	8	16	18	314
9月	36	302	14	26	50	328
*10月	3	33	5	8	8	42
*11月	11	191	20	31	31	222
*12月	1	7	5	17	6	24
*42年1月	0	0	2	4	2	4
*2月	1	108	6	31	7	139

(注) *印は見込み。

起 債 状 況

(単位・億円、カッコ内純増ベース)

	8月	9月	前月比	10月 (見込み)	前年 10月	
	合 計	665 (363)		657 (394)	△ 8 (31)	740 (484)
事 業 債	275 (71)	248 (70)	△ 27 (△ 1)	328 (148)	371 (249)	
	一般	147 (8)	91 (△ 30)	△ 56 (△ 38)	199 (91)	241 (169)
	電力	128 (62)	157 (100)	29 (38)	129 (57)	130 (80)
地 方 債	60 (42)	61 (42)	1 (0)	62 (40)	57 (38)	
政 保 債	330 (251)	348 (283)	18 (32)	350 (295)	309 (281)	
金 融 債	1,427 (478)	1,530 (619)	103 (141)	1,408 (516)	1,097 (477)	
	利付	622 (336)	795 (486)	173 (150)	647 (370)	482 (358)
	割引	805 (143)	735 (133)	△ 70 (△ 10)	761 (146)	615 (120)
新 長 期 国 債	200	1,200	1,000	800	—	
証券会社 引受け分	68	70	2	73	—	

き続き低調である。

一方9月の起債(純増ベース)は、政保債、電力債、金融債が前月を上回り、地方債が前月並みとなった反面、一般事業債は、引き続き起債意欲の低調に加え、一部B格債の格上げ問題に対する思わくもからんで30億円の純減となった(純減は33年4月の4.5億円以来初めて)。一方国債発行額は、資金需給の季節的緩和に即応して1,200億円の多額にのぼった(うち証券会社引受け分70億円)。これらの消化状況をみると、純減となった一般事業債の応募超過状態がいっそう強まったほか、これまで一部抱合せ消化の行なわれていた電力債、地方債も、前月同様、全額円滑に消化された。また金融債は、10月以降の発行条件引下げを控え、地銀、相互、信金筋のスポット買いが増加し、これに対して発行金融機関も安定消化先を中心に弾力的に売り応じた。一方国債の証券会社扱い一般募集も、個人向け販売活動が軌道に乗ってきたこともあって、その消化は引き続き順調であった。

実 体 経 済 の 動 向

◇生産の拡大が続く中で出荷の伸びはいくぶん鈍化

最近における経済活動は、引き続き根強い拡大を続けている。ただ、こうした中で、このところ出荷面に多少増勢鈍化がうかがわれる反面、生産は、減産緩和ないし生産調整の撤廃などを背景にむしろ増勢を強めつつあり、その結果、生産よりも出荷の拡大が先行するというこれまでの両者の関係は、最近では逆転するに至っている。すなわち、生産、出荷について四半期別の動き(季節変動調整済み)をみると1～3月、4～6月の出荷は、それぞれ前期比+3.9%、+4.8%、と同時期の生産の伸び(1～3月+3.7%、4～6月+4.2%)を多少上回っていたが、7～9月には生産が+5.5%とさらに増勢を強めた反面、出荷は+2.4%とやや伸び悩みぎみとなっている。こうした出荷

の伸び悩み傾向は、7、8月に、鋼船や電力向け大型機械の出荷がたまたま大幅減となったことも見のがせないが、同時にこれまでの出荷増をささえてきた官公需や輸出の増勢がこのところいくぶん鈍くなり始めていることも多少は響いているものと思われる。すなわち官公需については、実体的な需要と関連の深い一般的支出(総支出から金融的支出、移転的支出と目される項目を除いたもの)およびその中の公共事業関係費の支払が、4～6月に比べ7～9月は増勢が若干鈍化していることや、官公需の波及効果が比較的大きいとみられる建設資材の出荷がこのところいくぶん伸び悩んでいることなどから推して、財政面からの需要拡大効果は最近やや弱まっているのではないかと思われる。また、輸出についても、鉄鋼など一部の業種では最近の内需の盛り上がりに影響されて輸出意欲が若干減退していることもあって、その増勢は若干鈍化の気配をみせている。このように官公需や輸出に増勢鈍化の動きがみられる一方、民間投資活動は徐々に上向き傾向をみせている。すなわち、まず在庫投資についてみると、企業の慎重な態度から従来の景気回復期におけるような増勢はみられないにしても、製品在庫がこのところ増加し、つれて在庫率もようやく下げ止ま

りの様相をみせている。またメーカーの原材料在庫も大勢として緩慢ながら増勢を続けているものとみられる。他方、設備投資についても、このところ足踏み状態を続けてきた資本財の出荷が9月はかなりの増加となっていることや、月によりフレの大きい電力、海運を除く機械受注が上昇傾向にあることなどからみて、次第に上向きの傾向を強めているものとみられる。また、この間消費需要も、ペースアップや時間外収入の増加などによる可処分所得の増加を背景に漸次底堅さを増しており、現に百貨店売上高や全都市の家計消費支出は一応順調な伸びをみせている。

以上みてきたように、このところ総需要の構成内容に徐々ながら変化が生じつつあるが、当面、官公需や輸出の増勢鈍化の程度はさして大きなものではなく、一方民間投資活動も企業の慎重な態度から、その増勢はゆるやかなものとみられるため、全体としてこれまでの需要の増加基調が大きく変化しつつあるとはみられない。こうした事情を彼此勘案すると、経済の拡大テンポは今後ある程度鈍化することはあっても、大勢としては根強い拡大基調を持続してゆくものと思われる。

(生産——引き続きかなりの増勢)

8月の鉱工業生産(季節変動調整済み)は、前月比+1.2%と引き続きかなりの増加となった。これを業種別にみると、一般機械、石油など一部の業種ではかなりの減産となった反面、鉄鋼、繊維、化学、紙・パルプ、電気機械など大半の業種ではいずれも相当の増加を示した。また、特殊分類別には、一般資本財がボイラー、原動機、化学機械などの著減を映じてかなりの減少となったほかは、生産財や消費財は着実に増加し、また建設資材、輸送機械なども引き続き増加した。このように、全体として生産の増勢が根強い動きを示している中であって、鉄鋼が生産調整の緩和を映じて前月に引き続き大幅増産となったのをはじめ、市場人気の回復や輸出引き合いの増加などから化学繊維、綿糸布など繊維製品がかなり好伸し、民生用電機(テレビ、ラジオ等)も相変わらず根強い

鉱工業生産の動向
(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減率・%)

	40年	41年				41年		
	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月	
鉱 指 数	175.2	181.7	189.3	199.8	197.0	199.4	202.9	
工 前 期(月)比	0	3.7	4.2	5.5	2.3	1.2	1.8	
業 前 年 同 期(月)比	1.5	4.2	9.1	14.0	12.6	15.4	14.2	
投 資 財	-1.3	2.9	3.2	5.5	2.0	-1.2	2.1	
資 本 財	-2.2	3.4	2.5	6.1	2.7	-2.0	3.2	
同 (輸送機械を除く)	-3.5	3.9	5.4	2.6	2.1	-3.7	3.3	
輸 送 機 械	-1.9	3.0	-1.1	12.1	3.7	0.9	4.9	
建 設 資 材	1.2	0.8	4.4	4.6	1.2	0.2	0.2	
消 費 財	2.9	4.1	1.3	3.2	-0.1	2.5	0.5	
耐 久 消 費 財	0.2	8.2	2.7	7.6	2.0	2.0	2.9	
非 耐 久 消 費 財	4.4	1.0	1.6	1.2	-0.8	2.5	-0.2	
生 産 財	0.3	4.8	5.5	5.8	2.6	2.0	1.4	

(注) 通産省調べ、9月は速報。
前年同期(月)比は原指数による。

増勢を示したこと、反面、一般機械が不規則変動の大きい電力向け大型機械(ボイラー、原動機)の著減や、前月に著増をみた運搬機械、繊維機械の反動減などからかなりの減産となったこと、などが当月の特色的な動きとみられる。

なお、9月の生産(速報、季節変動調整済み)は、前月比+1.8%と引き続きかなりの増勢となった。これを特殊分類別にみると、非耐久消費財が微減となったほかは、一般資本財、輸送機械の大幅増をはじめ各財ともかなり増加した。一般資本財の増加は、前月著減をみたボイラーおよび原動機の反動増や繊維機械、金属加工機械、運搬機械などの大幅増などから一般機械が著増したことによるものであり、また輸送機械の増加は、鉄道車両の著増に加え、乗用車、大型トラックなど自動車がかかなり増加したことによるものである。

(出荷—増勢続く)

8月の鉱工業出荷(季節変動調整済み)は、前月比+0.7%となり、前月の動き(同+0.6%)を含めてみると、これまでの増勢はいくぶん鈍化している。しかしこれには不規則変動の大きいボイラー、原動機などの著減による資本財の減少、前月に著増をみた耐久消費財の反動減などの特殊事情

が少なからず響いており、ちなみに、ボイラー、原動機、耐久消費財を除いてみると前月比+1.4%の増加、また、生産財の出荷がなお根強い動きをみせているところからみると、これまでの出荷基調が大きく変化しつつあるものとはみられない。

次に8月の動きを業種別にみると、一般機械、民生用電機などはかなり減少したが、鉄鋼、化学、セメントなどは引き続き着実に増加し、またこのところ停滞ぎみに推移してきた繊維、紙、精密機械なども増加に転じた。これを特殊分類別にみると、前月に著増した耐久消費財はその反動からかなりの減少となり、建設資材も微減したが、反面生産財、非耐久消費財、輸送機械はいずれも増加した。

当月中の目立った動きとしては、鉄鋼が自動車、造船、建設、事務用機械など各業界からの需要好調を映じ鋼板類、条鋼類などを中心に引き続き好伸したこと、このところ伸び悩みぎみにあった繊維も、市況回復、輸出引き合い活発化などに伴う機屋、商社筋の買進みから各品目とも軒並みに増加したこと、通信機械、発送配電機器、セメントなどの官公需関連品目もいくぶん増加のテンポは鈍くなっているものの、着実な増勢をたどったことなどがあげられる。

なお、9月の出荷(速報、季節変動調整済み)は、前月比+1.3%と7、8月に比べると、伸び悩み傾向は多少回復した。これは、資本財輸送機械が急増したほか、前月著減した一般資本財が増加したことが大きく響いている。特殊分類別にみると、非耐久消費財、建設資材は若干減少したが、反面、鉄道車両、鋼船の集中出荷を映じて輸送機械が著増したのをはじめ、耐久消費財(家庭用電機等)、生産財(機械、鉄鋼等)もかなりの増加となった。この間、一般資本財は、ボイラーおよび原動機、金属加工機械、繊維機械などの一般機械が著増し、また鉄鋼も続伸した反面、電気機械や非鉄金属がかなりの減少を示したため、結局前月を若干上回る程度の伸びにとどまった。

(在庫—製品在庫は下げ止まり)

8月の鉱工業製品在庫(季節変動調整済み)は、

鉱工業出荷の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減率・%)

	40年		41年				41年		
	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月		
鉱工業指数	172.6	179.3	187.8	192.4	190.6	192.0	194.5		
前期(月)比	0.6	3.9	4.8	2.4	0.6	0.7	1.3		
前年同期(月)比	3.7	2.7	11.7	12.1	12.7	11.8	11.9		
投資財	-1.2	5.9	6.5	-3.7	-2.8	-1.4	3.7		
資本財	-2.1	7.6	3.3	-2.2	-3.4	-1.9	5.1		
同(輸送機械を除く)	-0.3	2.1	6.1	1.0	1.5	-3.3	0.7		
輸送機械	-6.2	14.8	0.3	-3.8	-7.9	1.1	9.4		
建設資材	1.2	1.4	3.9	3.0	0.4	-0.6	-0.1		
消費財	2.3	1.4	4.2	1.7	1.5	1.2	-1.0		
耐久消費財	-2.3	0.4	11.8	5.8	8.9	-3.1	1.9		
非耐久消費財	3.6	2.4	1.9	0.5	-0.6	2.0	-1.0		
生産財	0.6	4.3	6.2	5.0	2.4	1.6	0.8		

(注) 通産省調べ、9月は速報。
前年同期(月)比は原指数による。

前月比+0.4%とわずかながら5か月ぶりの増加となった。これを業種別にみると、鉄鋼は鋼板類、条鋼類などの出荷好調を映じて引き続き減少し、電気機械(発送配電機器、通信機械)、紙なども減少したが、他方、化学(アクリルニトリル、ブタノール、有機ゴム等)がかなり増加したのをはじめ、非鉄(亜鉛)、石油なども多少増加した。また特殊分類別には、一般資本財(主として電気機械)、耐久消費財、建設資材がともに減少した反面、非耐久消費財、輸送機械、生産財はいずれも増加した。

上記のような出荷、在庫の動きを映じて、8月の鉱工業製品在庫率は115.1(前月比-0.3%)と引き続き低下したが、減少幅そのものは次第にせばまっており、この点からみるとようやく下げ止まりの段階にはいりつつあるものとみられる。在庫率の動きを業種別にみると、鉄鋼、繊維、電気機械などが引き続き低下した反面、一般機械、石油は上昇した。また特殊分類別では、生産財、非耐久消費財、資本財輸送機械が低下を続けた反面、一般資本財、建設資材、耐久消費財はいずれもわずかながら上昇を示した。

鉱工業製品在庫の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)末比増減率・%)

		40年		41年		41年		
		12月	3月	6月	9月	7月	8月	9月
鉱工業	指数	225.8	228.9	221.4	224.6	220.0	220.9	224.6
	前期(月)比	-2.4	1.4	-3.3	1.4	-0.6	0.4	1.7
	前年同期(月)比	5.8	5.2	-0.5	-2.9	-2.0	-2.3	-2.9
	製品在庫率指数	131.0	127.7	116.7	115.5	115.4	115.1	115.5
業	投資財	-5.0	-3.8	-4.5	7.0	2.2	0	4.6
	資本財	-7.1	-3.2	-5.0	8.8	2.4	0	6.1
	同(輸送機械を除く)	-10.0	-0.1	-7.4	3.2	0.7	-1.1	3.6
	輸送機械	5.0	-12.9	-1.9	29.3	8.2	0.8	18.6
	建設資材	-0.9	-5.2	-3.0	3.6	2.1	-0.4	1.9
	消費財	-4.7	4.5	-4.7	-0.2	-2.3	0.7	1.4
	耐久消費財	-8.9	12.6	-9.8	-2.9	-5.0	-1.7	4.0
	非耐久消費財	0.2	-2.7	-3.1	2.2	-0.5	1.3	1.3
	生産財	-0.7	3.3	-1.2	-0.3	-0.9	0.3	0.3

(注) 通産省調べ、9月は速報。
前年同期(月)末比は原指数による。

なお、9月の製品在庫(速報、季節変動調整済み)は、資本財輸送機械(乗用車、自動二輪車等)をはじめ、一般資本財(非鉄二次製品、一般機械、電気機械等)、耐久消費財(家庭用電機、輸送機械等)などの著増を主因に、前月比+1.7%とかなりの増加を示した。

この結果、製品在庫率は115.5(前月比+0.3%)と久方ぶりに上昇し、ようやく下げ止まりぎみとなった。

8月のメーカー原材料在庫(季節変動調整済み)は、前月比-0.2%と久方ぶりに減少した。業種別には、生産調整緩和を控えた石油精製メーカーの原油や化学繊維メーカーの石油化学製品などが増加した反面、鉄鋼、機械、非鉄、化学ではかなりの減少を示した。鉄鋼、機械がかなりの減少となったのは、生産拡大に伴う原材料消費の伸長に対し、在庫手当がいくぶん遅れぎみとなったことによる面も少なくないようで、企業の原材料在庫投資態度がここへきて弱まったとはみられない。当月の動きを財別にみると、輸入素原材料は鉄鉱石、石油、コークス用原料炭、羊毛などを中心に根強い増勢を示したが、国産素原材料は鉄くず、パルプ材などを中心に引き続きかなりの減少となり、また、6月以降かなりの増勢をみせてきた国

製造工業原材料在庫および在庫率の推移

(季節変動調整済み)

	40年		41年		41年		
	12月	3月	6月	6月	7月	8月	
在庫指数	124.0	127.7	130.5	130.5	132.7	132.4	
前期(月)末比	0.2	3.0	2.2	0.9	1.7	-0.2	
素原材料	-0.3	2.6	6.3	0.3	0	0	
うち輸入分	1.3	0.6	8.8	2.5	1.8	1.4	
製品原材料	0.5	3.3	0.6	1.4	3.1	-0.4	
うち国産分	0.7	3.3	0.3	1.5	2.9	-0.5	
在庫率指数	74.7	74.5	73.2	73.2	72.4	70.2	
素原材料	72.4	72.6	72.9	72.9	72.9	70.5	
うち輸入分	69.7	69.6	71.2	71.2	72.4	71.1	
製品原材料	78.5	79.2	76.6	76.6	76.3	74.1	
うち国産分	78.4	78.9	76.2	76.2	75.8	73.6	

(注) 通産省調べ、8月は暫定。
前期(月)末比増減率。

産製品原材料も、機械工業の鋼材、織物業の糸などを中心に微減となった。

この間、8月の原材料消費は、前月比+2.9%と目立って増加した。これを業種別にみると、鉄鋼、石油、紡績、非鉄などがいずれも+4%台の著増を示したほか、機械、紙・パルプなどでもかなりの増加となった。以上のような在庫、消費の動向を映じて在庫率は前月比-3.0%と大幅に低下した。

次に、7月の販売業者在庫(季節変動調整済み)は、前月比+1.3%とかなりの増加となったが、最近の動きを3ヵ月移動平均によってならしめると、4月+1.5%、5月-1.4%、6月+0.1%とほぼ横ばい状態で推移している。7月の増加は、主として小型トラックを中心とする自動車、石油製品、生ゴムなどが大幅増となったことによるもので、鋼材、綿花、羊毛などはユーザーの買進みから依然として減少を続けている。これを形態別にみると、素原材料が輸入分、国産分ともに著減している反面、製品はかなりの増加となっている。

販売業者在庫の推移

(季節変動調整済み)

	40年	41年		41年		
	12月	3月	6月	5月	6月	7月
総合指数	196.3	205.9	197.1	200.2	197.1	199.6
前期(月)末比	1.0	4.9	-4.3	0.6	-1.5	1.3
素原材料	-13.7	1.2	5.9	-1.6	-4.2	-8.2
製品	1.7	6.0	-5.0	1.1	-1.4	3.1

(注) 通産省調べ、前期(月)比増減率。

(設備投資——機械受注の増勢続く)

設備投資の先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節変動調整済み)をみると、8月は+16.4%と著増した。これは、7月に著減した電力が、その反動から著増したことによる面が少なくないにしても、一般に建設業をはじめとして非製造業が引き続きかなりの水準で推移しているほか、製造業も機械、鉄鋼などでは徐々に増勢をみせている点も見のがせない。

なお、9月の機械受注(速報、海運を除く民需、季節変動調整済み)は前月著増の反動もあって-9.1%の減少となった。このように、月々のフレはかなり大きいのが、四半期別にくくってみると、1~3月+2.7%、4~6月+0.1%、7~9月+11.6%とこのところ増勢を強めており、また不規則変動の大きい電力、海運を除いた民需の動きをみても、4~6月+2.2%、7~9月+6.7%とこのところかなりの増勢を示している。

需要先別機械受注の推移

(季節変動調整済み、月平均、単位・億円)

	41年			41年		
	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月
民需	763	718	845	814	825	896
	(5.3)	(- 6.0)	(17.7)	(9.0)	(1.4)	(8.6)
同(除海運)	653	653	729	679	790	718
	(2.7)	(0.1)	(11.6)	(- 1.8)	(16.4)	(- 9.1)
製造業	309	354	346	359	361	318
	(14.9)	(14.4)	(- 2.2)	(9.7)	(0.6)	(- 12.2)
非製造業	458	372	503	471	462	577
	(1.1)	(- 18.7)	(35.3)	(13.0)	(- 2.0)	(25.0)
同(除海運)	344	308	386	324	434	398
	(- 7.2)	(- 10.4)	(25.1)	(- 8.9)	(33.9)	(- 18.2)

(注) 企画庁調べ、9月は速報。
カッコ内は前期(月)比増減率。

◇商品市況は主力商品の高値訂正続く

9月から10月前半にかけての商品市況をみると、セメント、化学、紙などは引き続き底堅い動きを示し、また8月に暴落した銅も9月後半から反騰に転じたが、反面鉄鋼では高値訂正の動きが続き、また繊維でも生糸を除けばおおむね軟化するなど、主力商品の訂正安商状が目立った。

このような主力商品の軟化は、生産調整の撤廃などを契機として、一般にこれまでの行き過ぎた人気相場に対する反省気運が広がってきたことによるものとみられるが、このほか、生産調整撤廃などによりメーカーの生産態度が弾力化しているところから、一部には将来の供給増加懸念が多少とも相場の足を重くしはじめている面があることも否めない。

もっとも、これまでの市況上伸をささえてきた需要の増加基調には格別の変化はなく、なかには秋需期入りからむしろ力強さが加わってきているものも少なくないとみられることから、先行き市況の動向については、一気に大幅な軟化を招くといった事態はまず考えられず、多少の高下を繰り返しつつも当面は落ち着いた動きを示すように思われる。

次に商品別の動きをやや詳しくみると、まず鉄鋼では、需要は引き続き堅調に推移しているものの、他方供給面でも徐々に増産体制が整えられつつある。このため、ひところのような需給逼迫感次第に後退し、小口需要家の仕振りが漸次落着きを取り戻すとともに特約店の売り腰もやや軟化しており、鋼板類、条鋼類ともに訂正安商状が続いている。繊維でも、品不足から生糸が高騰したほかは、各品目とも訂正安商状を呈した。これは、人絹糸をはじめとして一般に模様ながめ気運の台頭により、これまでの高値訂正過程がそのまま続いているという事情によるものであるが、豪

毛相場安、米綿の値下がりなど海外事情の変化(そ毛糸、綿糸)、需要期明けによる機屋筋の手当て一服(そ毛糸)などの要因も少なからず響いているものとみられる。非鉄については、8月に暴落を演じた銅は海外高から9月後半以降急反発に転じた。この間、鉛は供給の増加傾向から騰勢一服となったが、他方、亜鉛は輸出伸長と内需の増加気配から需給は引き締まりぎみとなり、市況も下げ止まりを示した。次に石油では、需要期の接近した灯油および系列販売体制が徹底している揮発油を除き、各品目とも軟調に推移した。10月以降の生産調整撤廃に伴い、メーカー筋では増産気構えをみせていることから、大口需要家からの値下げ要請を誘い、これがある程度市況を軟調さみにしている点は否めない。一方、化学は、関連業界の生産水準上昇による需要の増大から、このところ品薄状態を示す品目がかかなり増加してきており、総じて強含みに推移した。セメントは、需要の好伸により依然品薄状態が続いており、大口需要家向けに続き、中小土建業者向けについても値

卸売物価指数の推移

(単位・%)

	ウエイト	引締め前	引締め後	引締め解除後	40年7月以降*	最近の推移						
		37/11	38/12	39/12	40/8	7月	8月	9月	9月			10月
		~38/11	~39/11	~41/9	~41/8	7月	8月	9月	上旬	中旬	下旬	上旬
総平均	100.0	+ 3.7	- 0.7	+ 4.8	+ 4.8	+ 0.3	+ 0.2	- 0.1	保合	保合	+ 0.2	+ 0.4
食料品	16.4	+ 9.2	- 4.0	+ 9.1	+ 5.2	- 0.3	+ 0.5	+ 0.6	保合	保合	+ 0.6	+ 0.1
繊維品	12.9	+ 11.1	- 6.7	+ 5.4	+ 6.9	+ 1.7	+ 1.5	+ 0.4	- 0.2	保合	+ 0.2	保合
鉄鋼	10.2	+ 4.2	- 0.5	+ 2.2	+ 5.2	+ 1.2	+ 3.1	- 0.5	- 0.4	- 0.2	- 0.2	- 0.3
非鉄金属	4.5	+ 1.1	+ 19.9	+ 14.6	+ 16.1	- 2.2	- 10.1	- 7.1	- 2.3	+ 0.2	+ 1.0	+ 4.2
金属製品	3.5	+ 0.2	+ 3.6	+ 3.4	+ 2.9	+ 1.1	+ 0.1	+ 0.6	+ 0.1	+ 0.2	保合	+ 1.1
機械器具	20.2	- 1.4	- 0.4	+ 0.8	+ 1.1	- 0.1	+ 0.2	保合	保合	保合	保合	- 0.1
石油・石炭	5.2	+ 0.8	- 0.8	- 0.1	- 1.8	+ 0.3	- 0.1	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.2	- 0.2	- 0.1
木材・同製品	6.1	+ 3.6	- 1.1	+ 15.7	+ 17.7	+ 1.5	+ 2.2	+ 3.0	+ 2.3	+ 0.3	+ 0.7	+ 1.5
窯業製品	3.0	- 0.2	- 1.5	+ 3.3	+ 2.6	+ 0.1	保合	+ 0.2	保合	+ 0.1	+ 0.4	+ 0.5
化学品	7.4	- 0.2	+ 2.3	- 2.6	- 2.3	- 0.8	+ 0.4	- 0.1	+ 0.1	- 0.2	+ 0.1	+ 0.1
紙・パルプ	3.3	+ 6.4	+ 2.7	+ 0.2	+ 3.2	+ 0.2	+ 0.4	+ 0.2	保合	保合	保合	+ 0.2
雑品目	7.5	同水準	+ 0.7	+ 3.8	+ 3.4	+ 0.7	+ 0.2	- 0.6	- 0.1	- 0.4	- 0.3	- 0.3
工業製品	79.5	+ 2.9	- 0.8	+ 3.2	+ 3.9	+ 0.3	+ 0.2	- 0.2	- 0.2	保合	+ 0.1	+ 0.2
非工業製品	20.5	+ 6.3	- 0.4	+ 10.5	+ 8.4	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.5	+ 0.4	保合	+ 0.7	+ 0.8
非鉄・食料を除く総平均	79.1	+ 2.5	- 1.0	+ 3.3	+ 4.0	+ 0.6	+ 1.0	+ 0.3	+ 0.1	保合	保合	+ 0.2

* 印は40年中のボトム。

上げが徐々に浸透をみている。このような情勢下、メーカーの生産態度はかなり弾力化しており、中堅メーカー筋の一部では、非能率設備を除けばほぼフル操業に近い状況とも伝えられている。紙も、秋需期入りから荷動きは次第に底堅さを増し、特に企業の広告宣伝活動活発化から洋紙の出荷は好調を示している。このため、一部では、品不足状態すらうかがわれ、市況も総じて強含みに推移した。この間、砂糖は懸案の不況カルテルが認可されたものの、その内容が意外にきびしかったことや、カルテル空白期間中の野放し生産による在庫の増加、などから低迷商状を脱するには至らなかった。

(卸売物価——微反落)

9月の本行卸売物価は、前月比-0.1%と6か月ぶりに微反落した。木材、食料、繊維などは引き続き上昇をみたものの、非鉄(銅系金属)が海外相場安、需要家筋の買控えなどから前月に引き続き大幅に下落したほか、鉄鋼、雑品目も小反落したためである。もっとも10月上旬には、非鉄、金属製品、木材などの上昇を主因に前旬比+0.4%と反発を示した。なお、非鉄、食料を除いてみると、8月+1.0%のあと、9月+0.3%、10月上旬+0.2%と、ひとところほどではないにしても依然騰勢を維持している。

(消費者物価——反騰)

9月の消費者物価(東京)は、前月比+0.7%と反発し、前月の下落分(-0.8%)をほぼ埋めたかたちとなった。これは被服や住居費の大幅上昇に加え、野菜、鶏卵、生鮮魚介などの食料も値上がりしたためであるが、季節商品を除いても、+0.7%と騰勢が目立っている。なお、9月の本行小売物価(東京)も+1.4%(除生鮮食品+1.6%)と大幅に上昇した。

(輸出入物価——輸出物価は保合い、輸入物価は下落)

9月の輸出物価は、金属(薄板、亜鉛鉄板などの鉄鋼類)が欧州諸国の輸出価格引上げから上昇し、また、食料も引き続き上伸したが、反面木材や化学などが下落したため、全体では保合いとな

った。

他方、輸入物価は繊維(豪毛、米綿)および金属、鉱物(銅系)が統落したほか、食料(アメリカ大豆、砂糖)も豊作から下落をみたため、前月比-1.3%と引き続きかなりの下落を示した。

この結果、交易条件は前月比+1.3%の好転を示し、100.4(35年=100)と1年ぶりに100台を回復した。

消費者・小売・輸出入物価の推移

(単位・%)

消費 者 物 価 (東京)	目 別	ウ ェ イト	前年度比 上 昇 率		最近の推移			最 近 の 年 同 月 比
			39年 度 平 均	40年 度 平 均	7月	8月	9月	
消 費 者 物 価 (東京)	総 合 (季節商品を除く)	100.0	+4.7	+6.8	-0.1	-0.8	+0.7	+4.1
	被 服 光 熱	12.7	+2.1	+3.8	-0.9	-1.0	+3.7	+3.4
	住 居 費	5.2	-0.1	+0.4	+0.3	-0.1	保合	+0.9
	雑 費	8.8	+4.1	+4.4	+0.5	+0.4	+0.5	+6.0
	食 料	30.3	+6.5	+7.5	+0.2	-0.1	保合	+9.7
	家 賃 地 代	43.1	+4.8	+8.1	-0.3	-1.4	+0.6	+0.3
	公 共 料 金	2.4	+9.0	+8.5	+1.9	+0.8	+0.9	+14.2
	自 由 料 金	19.0	+3.8	+6.7	+0.3	保合	保合	+10.9
	其 他 の 商 品	8.4	+11.0	+9.0	-0.2	+0.2	+0.1	+7.2
	其 他 の 商 品	27.1	+2.0	+3.1	-0.3	-0.7	+1.9	+3.5
消 費 者 都 市 物 価	総 合 (季節商品を除く)	100.0	+4.8	+7.4	+0.3	-0.6		+4.7
本 行 物 価	総 平 均 (生鮮食品を除く)	91.1	+4.5	+7.0	+0.1	-0.1		+5.9
小 売 物 価	総 平 均 (生鮮食品を除く)	100.0	+2.6	+4.6	+0.1	-0.1	+1.4	+2.5
本 行 物 価	小 売 平 均 (生鮮食品を除く)	93.3	+1.9	+4.4	+0.1	+0.3	+1.6	+3.4
輸 出 物 価	輸 出		+0.8	-0.7	+0.4	+0.8	保合	+1.2
輸 入 物 価	輸 入		-0.8	-1.0	保合	-1.2	-1.3	+1.2
交 易 条 件	交 易 条 件		+1.5	+0.3	+0.4	+2.0	+1.3	同水準

(注) 特殊類別消費者物価指数は、総理府消費者物価指数をもとに、本行統計局が算出したもの。
特殊類別指数各額と総理府指数各費目の関係は次のとおり。
1. 「食料」は両者同一。
2. 「家賃地代」は住居費中の家賃地代と同一。
3. 「公共料金」は、電気、ガス、水道、診察、入浴、教育、新聞など光熱、住居、雑費中の該当品目。
4. 「自由料金」は、仕立て、洗たく、理髪、パーマ、映画など住居、被服、雑費中の該当品目。
5. 「その他の商品」は被服、光熱、住居、雑費中の該当品目。

◇先行指標面で輸出鈍化、輸入増加のきざし

9月の国際収支は、長期資本の流出を主因に、資本収支の赤字が例月を大幅に上回ったものの、貿易収支が輸出の好伸により大幅な黒字となった

ため、総合では84百万ドルの黒字となった(前月同59百万ドル)。すなわち、貿易収支は、前月伸び悩んだ輸出が再び増加したのに対し、輸入は前月を10百万ドル方下回ったため、差引き237百万ドルの黒字となった(前月同193百万ドル)。

他方、資本収支では、アジア開銀への出資や、ガリオア・エロアの返済などが重なったため長期資本が112百万ドルと大幅な赤字となった。この

国際収支

(単位・百万ドル)

	41年						前年 同月
	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月	
経常収支	28	64	159	189	122	167	113
貿易収支	123	149	231	264	193	237	191
輸出	690	769	832	854	806	837	697
輸入	567	620	601	590	613	600	506
貿易外収支	△ 83	△ 76	△ 64	△ 66	△ 65	△ 60	△ 71
移転収支	△ 12	△ 9	△ 8	△ 9	△ 6	△ 10	△ 7
長期資本収支	△ 52	△ 43	△ 65	△ 48	△ 34	△ 112	△ 70
短期資本収支(注1)	4	5	10	22	7	0	19
誤差脱漏	18	2	6	27	22	29	22
総合収支	△ 2	19	78	92	59	84	84
金融勘定(注2)	△ 2	19	78	92	59	84	84
外貨準備増減	1	2	20	50	9	19	5
その他	△ 3	20	98	142	50	103	79

(注) 各期月平均。

1. 金融勘定に属するものを除く。
2. 金融勘定の△印は「外貨準備増減」では資産の減、「その他」では資産の減または負債の増を示す。

輸出入指標(季節調整済み)の推移

(単位・百万ドル)

	国際収支			通関		信用状		輸出	輸入
	輸出	輸入	貿易 尻	輸出	輸入	輸出	輸入	認証	承認
40年									
10~12月	684	544	140	693	693	598	311	710	661
41年									
1~3月	773	558	215	788	741	643	328	800	687
4~6月	787	598	189	790	763	673	342	846	673
7~9月	814	620	194	828	805	678	361	858	787
41年									
5月	788	598	190	787	769	674	353	838	700
6月	800	594	206	802	755	678	323	846	707
7月	827	585	242	851	770	660	335	860	723
8月	786	634	152	792	817	703	363	854	775
9月	831	640	191	840	827	671	386	860	862

(注) 季節調整はセンサス局法による。各期月平均。

間、金融勘定面では、期末月の関係からユーロ・ダラー取り入れがかさんだ一方、輸出手形の買増や、業者段階の円シフトを映じた外銀ユーザンスの減少などが響いて為替銀行の短期資産負債バランスはかなり好転したが、反面、外貨準備は19百万ドルの減少となった。

9月の輸出は、前年同月比+20.1%と著伸した。もっとも、前年同期は、鉄鋼輸出の頭打ちもあって輸出がいくぶん低目の水準にあったことも響いているが、季節調整済みでみても、前月を5.8%上回る831百万ドルと従来の最高となった。通

輸出信用状の内訳

(単位・百万ドル)

	41年					
	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月
合計	634 (+13)	669 (+15)	683 (+14)	671 (+11)	713 (+19)	665 (+13)
食料	29 (+34)	25 (+12)	29 (-6)	26 (-33)	28 (+1)	32 (+30)
水産品	20 (+54)	16 (+7)	21 (-7)	16 (-48)	21 (+14)	25 (+45)
繊維製品	113 (+1)	117 (+1)	130 (+11)	126 (+10)	148 (+18)	117 (+5)
綿製品	26 (-7)	25 (-13)	29 (-4)	28 (-10)	33 (+0)	25 (-1)
化学製品	50 (+17)	51 (+25)	48 (+11)	49 (+21)	47 (+7)	50 (+6)
肥料	16 (-7)	16 (+66)	13 (+4)	13 (+36)	11 (+2)	14 (-14)
金属製品	143 (+8)	144 (+4)	143 (+3)	148 (+10)	140 (+8)	140 (-7)
鉄鋼	132 (+9)	134 (+5)	131 (+5)	135 (+8)	129 (+10)	129 (-2)
機械	169 (+28)	187 (+31)	193 (+31)	180 (+21)	206 (+38)	193 (+34)
船舶	10 (+4)	9 (+74)	10 (+41)	7 (+42)	8 (+11)	15 (+63)
自動車	44 (+43)	46 (+5)	36 (+16)	35 (-1)	38 (+39)	35 (+16)
その他	130 (+8)	146 (+18)	139 (+16)	141 (+12)	143 (+16)	133 (+20)
北米	278 (+30)	295 (+22)	283 (+20)	287 (+18)	288 (+22)	275 (+21)
アジア	170 (-2)	182 (+9)	208 (+22)	200 (+23)	225 (+28)	199 (+14)
ヨーロッパ	81 (+12)	73 (+12)	69 (-9)	69 (-18)	69 (-1)	70 (-7)
その他	105 (+4)	119 (+8)	122 (+6)	115 (+0)	131 (+11)	121 (+7)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%)。各期月平均。

関統計によって商品別の動きをみると、船舶が前月著減の反動もあって再び前年を5割近く上回ったほか、自動車、電気機器、合繊織物などが好調な伸びを示した。一方、鉄鋼は前年同期比-1%減少となり、この結果、本年度上期中では前年同期を6%方下回った。かかる本年上期の伸び悩みは昨年春から夏場にかけては、鉄鋼スト懸念から対米輸出が急増したという事情はあるにしても、最近、内需の増大、市況の回復から輸出意欲がやや後退し、これが輸出の伸び悩み傾向を招いている点も見のがせない。なお、地域別では、韓国、香港、南ベトナムなどアジア向けおよびアメリカ向けが依然好調を続けている。次に、先行指標の輸出信用状の動きをみると、前年同月比+12.8%（8月+18.6%）とやや伸び悩みとなり、季節調整済み前月比でも-4.5%と減少している。品目別では、機械、繊維製品が引き続き好調の反面、鉄鋼は前年を下回っており、化学製品も鈍化傾向を示している。

一方、9月の輸入は、前年同月比+18%の増加となった。本年にはいつてからの輸入の動向を季節調整後の実勢でみると、4月までかなりの増加を続けたあと、5～7月にはいくぶん減少を示した。しかし、8月には再び急増し、9月もさらにこれを上回るなど、ここ一両月の動きからみると、輸入は再び増勢を強めつつあるものとみられる。商品別の動きをみると、石油、石炭、大豆、木材、羊毛など原燃料が大幅に増加しているほか、小麦など食料品の増加も目立っている。次に先行指標の輸入承認、輸入信用状の動きをみると、9月はいずれも前年同月比3割内外の著増と

なり、季節調整後の実勢でも前月比それぞれ+11.2%、+6.2%と著しく増加し、従来の最高水準に達した。品目別では、食料品のほか、繊維原料、燃料、銑鉄、くず鉄など原燃料の増加が目立っている。このところ輸入関連産業の生産が着実な上昇をたどっていることからみて、今後の輸入は引き続き増勢を示すものと思われる。

輸入承認品目別内訳

(単位・百万ドル)

	41 年					
	1～3月	4～6月	7～9月	7月	8月	9月
食料品	129 (+9)	143 (+15)	136 (+17)	112 (-11)	138 (+41)	158 (+26)
原燃料	401 (+22)	400 (+14)	428 (+24)	420 (+19)	413 (+24)	450 (+27)
綿花	38 (-3)	27 (-13)	32 (+19)	31 (+29)	31 (+22)	37 (+14)
羊毛	34 (+22)	36 (+30)	33 (+27)	34 (+23)	27 (+17)	34 (+36)
鉄鉱石	36 (+30)	37 (+9)	42 (+16)	36 (-5)	45 (+35)	47 (+19)
鉄鋼 くず	8 (-28)	10 (-26)	14 (+15)	12 (+5)	15 (+16)	16 (+24)
木材	40 (+36)	52 (+37)	55 (+39)	53 (+36)	53 (+27)	59 (+56)
石炭	19 (+25)	18 (+5)	21 (+12)	24 (+8)	15 (±0)	22 (+28)
石油	99 (+21)	83 (+3)	92 (+12)	87 (+13)	89 (+8)	98 (+14)
化学製品	40 (+14)	42 (+2)	43 (+16)	43 (+17)	43 (+15)	43 (+18)
機械	45 (-6)	57 (-25)	59 (+20)	60 (+25)	58 (-7)	60 (+59)
鉄鋼	8 (-27)	10 (-27)	16 (+52)	14 (+17)	13 (+26)	19 (+140)
その他	50 (+22)	65 (+19)	61 (+13)	63 (+23)	59 (-10)	60 (+35)
合計	674 (+16)	717 (+8)	743 (+21)	712 (+14)	725 (+19)	791 (+31)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%)。